

### アメリカ生活を振り返って

フレンズ 帰国生 母の会  
**西岡美香子**  
*Mikako Nishioka*

夫の海外赴任に伴い、当時小学校5年生と3年生の息子たちと共にアメリカ南部の田舎町で現地高校卒業までの10年間を過ごした。最初はABCすら分からなかった息子たちが、2年も過ぎた頃には私の通訳をするまでになった。やれやれひと安心と思ったら、実はここからが心配と苦勞のスタートだった。

#### ハイスクールに車で通学

息子たちは2人とも高校卒業までアメフト部に所属していた。特に次男はフレッシュマンの時にVarsity(代表チーム)の選手に抜擢された。

長男が運転免許を取得すると、親の送迎で通った学校も兄弟2人で車通学。途端に帰宅時間も遅く口数も少なくなり、親から離れていくという寂ささと共に心配の多い日々となった。そんな心配が的中した。ある朝、車で出かけて行った長男から「事故を起こした!」と電話があり慌てて現場に駆け付けると、大破した車が

路上に横転していた。ハンドルミスによる事故。救急車から息子が救急隊員に連れられ呆然と出てきた。隊員の方から「どこも異常はありません」と言われた時は、私のそれまでの衝撃と緊張が解け、崩れるかのごとく道路にへたり込んでしまった。あの朝、もしも助手席に次男が同乗していたらと考えたら今でもゾっとする。その後の事故処理はアトランタにある日本の保険会社に依頼した。事故後のショックで落ち込んでいた私たちへの温かく敏速できめ細やかな対応には、本当に気持ちが救われた。あの時の思いが記憶に強いのか、長男は日本の大学卒業後、その保険会社で現在働いている。

#### ヤンチャな次男と母子残留生活

その後、夫に帰国の辞令がおりた。考えた末、私と次男は高校卒業までの1年を残留することに決めた。ヤンチャな次男なので、常に行動をチェックし気を引き締めての生活だった。ただ、そんな中でのアメフトの試合の応援やチームのボランティア活動は本当に楽しい思い出だ。

ひとつ素敵な話がある。シーズン中に何度か父兄と選手、コーチ全員で盛大なバンケット(決起会と表彰式を兼ねた食事会)が開催される。まだまだ人種の隔たりがあるのか、父兄席は必ず黒人と白人に席が分かれた。私はいつも戸惑い複雑な心境だったが、ある時まるで映画のような一コマ。黒人スター選手のママが「別れず一緒に席に座りましょうよ!」と立ち上が



事故車をのぞき込む